

# 「SNSいじめ」「ゲーム障害」「誘拐監禁事件」

## 親は知らない 特集

# スマホで

# 子どもが危ない

前篇

ジャーナリスト  
石川結貴



小学生も被害者に……

頻発する“SNS”犯罪

コロナ禍は経済や社会活動への影響のみならず、子どもの生活にも影を落としている。学校は3カ月近く休校となり、再開後も分散登校や学校行事の中止など混乱がつづく。

勉強や進路の不安。友達と気軽に遊べない。部活動の試合ができず目標を見失う。そんなストレスからオンラインゲームやSNSにのめり込み、トラブルを抱える子どもも少なくない。「息子のゲーム依存が心配です」と嘆息するのは、中学2年生の長男と暮らす母親(45)だ。

シングルマザーで仕事を掛け持ちし、休校中は子どもに留守番させる毎日だった。孤独なステイホームのせい、長男はオンラインゲームに没頭。最後に生き残ったプレイヤーが勝者となるバトルロワイヤルゲームに、1日15時間を費やしたという。

「自室にこもりゲーム三昧でした。食事はゲームをしながら簡単に済ませ、部屋から出るのはトイレと入浴のときだけです。ゲーム内

のだ。それにしても、なぜ子どもはオンラインゲームに熱中するのか。

理由のひとつが「ソシャゲ」の流行だ。ソシャゲはソーシャルゲームの略称で、プレイヤー同士がインターネット上でゲームを同時進行し、友達になったり、チームを組んで闘ったりする。遊びながら人との関係性を得られるので、興奮や感動は大きく広がる。

ゲーム仲間と競えば闘争心が湧く。自分のキャラクターがレベルアップすれば、他のプレイヤーから賞賛される。戦関係ゲームでチームを組むと、先発隊や後方支援などの役割を与えられる。

ひとりでスマホやパソコンを操作しているようでいて、実際には他者とコミュニケーションを取り、楽しさを共有できるのだ。「ソシャゲは仲間との絡み(つきあい)がおもしろいし、ポイントがあると盛り上がります」と話すのは、愛知県男子高校生(18)だ。

のバトルで興奮するのか、奇声を上げたり、壁にペットボトルを投げつけた。私が注意すれば口論になり、親子で殴り合いのケンカをして警察を呼んだこともありました」

長男は一時昼夜逆転に陥り、学校再開後も生活リズムを取り戻せていない。勉強そっちのけで深夜までゲームをやめられず、眠気を解消するためのエナジードリンクを手放せなくなった。オンラインゲームに詳しくない人でも、パチンコや飲酒に置き換えれば、連日15時間もつづけることの異様さはわかるだろう。昨年5月には世界保健機関(WHO)が、ゲームのやり過ぎで日常生活が困難になる「ゲーム障害」を疾病と認定。ギャンブル依存症などと同じく、精神・行動の障

話題のアニメや音楽を愉しみ、動画を投稿して友達と盛り上がる。もはや子ども達の娯楽はスマホを抜きに語れないが、SNSやオンラインゲームへの依存が彼らを蝕み、犯罪に巻き込まれる現実もある。親は知らない実態にジャーナリスト・石川結貴氏が迫る。

害だと位置づけた。健康上だけでなく、犯罪に巻き込まれるリスクもある。9月には横浜市に住む9歳女児が、オンラインゲームを通じて知り合った男(38)の自宅に監禁される事件が起きた。女児は「親のスマホを借りていた」というが、今や低年齢の子どもでもゲームを通じた出会いが日常になりつつある。こうした事件では、犯罪者が言葉巧みに被害者に接近する。たとえばゲームで使う装備品などのアイテムを「プレゼントする」と持ち掛ける。フレンドリーな態度で安心させたあとに、「お礼」として顔写真を送るよう要求したり、実際に会う約束を取り付けたりする。

社会経験が未熟な子どもほど「親切な人」だと疑わず、意のままに操られてしまう

彼が言う「ポイントチャ」とはポイントチャットの略称で、プレイヤー同士が「声」で会話する。「基本はゲーム関係の話が多いけど、今、何してる?」みたいな日常会話もあります。チームを組んでいる場合は、作戦を練る戦略会議とか、戦闘が終わったあとの反省会とか、熱い議論に

なったりしますよ」もともとオンラインゲームでは、文字でやりとりするチャットが使われていた。それが「声」に変わったことでコミュニケーションが容易になった。会社で言えば、メール交換の打ち合わせからZoomのリモートミーティングに変わったようなものだ。

### 「廃課金」の悪循環

意思疎通がしやすい一方で、ポイントチャならではのトラブルも少なくない。「小学生くらいの声で、『死ね』『ぶっ殺す』なんてフツーにあります。熱くなるのはわかるけど、自己チェックが甘くなると、とにかくウザい。対戦相手が女子の声だったりすると、変にナシパする男がいたりして、場がしらけることもあります。チーム内の会議も結構面倒ですね。リーダーからノルマを振られても、声で断るってやりにくいので」

「ノルマ」と聞いてもピンとこないかもしれないが、これも問題のひとつだ。

ソシャゲ内でチームを組む団体戦を行う場合、メンバー同士の協力が必要になる。戦力の低いメンバーがいるとチーム全体に影響するため、「明日までに〇ポイント獲得」といった強化ノルマが課せられる。同調意識が強い日本の子どもは、「仲間に迷惑をかけられない」と思い込みやすい。ノルマ達成のために長時間ゲームをつづけたり、「廃課金」と呼ばれる高額な課金をして、有料アイテムを大量購入したりする。時間やお金をつぎ込むほど、「これまでの努力を無駄に

家族・教育問題、青少年のインターネット利用、児童虐待などをテーマに豊富な取材実績を持つ。主な著書に『子どもとスマホ〜おとなの知らない子どもの現実』、『スマホ廃人』、『毒親介護』など。

できない」という心理状態に陥り、ますますゲームをやめられない悪循環だ。ポイチャのような「声」でのコミュニケーションはSNSにも及んでいない。「トークアプリ」や「ボイスSNS」と呼ばれるが、要は利用者同士がランダムにつながり、匿名で会話できるシステムだ。90年代に流行したテレクラ(テレホンクラブ)のアプリ版とも言えるが、特に10代の人気を集めている。

「クラスの女子は半分くらい使ってますよ」と話すのは、千葉県に住む女子高校生(17)。「2年前から週に一、二度は利用する」という。「ヒマつぶしにちよつと誰かと話そうかって使い方もできるし、友達と一緒にいたずら半分でもやることもあります。「キモイ人に当たった」とか、話のネタにする」とみんなにウケるんです。

「テキストメッセージ(文章の投稿)は微妙なニュアンスが伝わらない。LINEのグループトークでも、ちよつとした言葉を誤解されてハブられる(仲間はそれになる)ことがあります。でも、ボイスSNSなら、相手の声から年齢や雰囲気、話のやりやすさ、話がおもしろいとか、優しそうかなだ」と「会っていいかな」って気持ちになるんです。実際に会ったことはないという彼女だが、その理由は「話した相手が遠くに住んでいたから」。逆に近くの人なら、「今から会おう」と会話が進み、ノリに任せて行動するというわけだ。

「恋愛体験を告白する動画や、性的嗜好を明かすツイートを発せられたようです。ただ、その後の影響までは冷静に考えられなかつたんでしょね」と沈痛な表情で語るのは、

### 「裏アカ」で性的な告白

「腫れがすごい」って、もう「祭り」状態ですよ。整形前後の変化だけでなく、かかった費用や周囲の反応まで明かされる。プライベートを切り売りするような動画だが、意外にも彼女は「応援したくなる」と言う。「自分の素をさらして、明るく生きるためにがんばってるわけでしょ? 私や友達も祭りの状態になるのは、告白動画に自分を重ねるからだと思います。自分じゃできないけど、この人スゴイよ。って感じて、つい見なくなるんです」

「同じ学校の男子名を出して〇〇君とやりたい」とか、「縛っていいよ」とか、目を覆うような内容でした。娘に聞いたですと事実ではなく、性的な想像でつい大げさに書いてしまったと。告白動画に感情移入しすぎて、赤裸々に語りたくなくなりました」

噂になってしまったのか。友達の「裏アカ」を見つけたことがあるという女子高校生(18)はこう話す。「裏アカと言っても、本アカと共通している部分があるんです。たとえば投稿している写真が同じとか、好きな芸能人や飼っているペットの名前を出しているとか。部活の試合で勝った、風邪をひいて学校を休んだ、そういう個人情報を書き込んであると、検索で引つかるんです」

「みんなやってるから平気」、そんな意識の低さが顕著に表れるのがSNSはじめだ。SNSはじめでは、不特定多数による誹謗中傷や、事実無根の情報に基づく一方的な攻撃が起きやすい。5月にはテレビの恋愛リアリティ番組に出演していたプロレスラーの女性が自殺に追いやられ、大きな問題になった。

「第13回未成年者の携帯電話・スマートフォン利用実態調査(2020年4月)」によると、子どものSNS利用率は小学生・77%、中学生・95%、高校生・97%に達する。

伏し目がちに語るのは神奈川県に住む女子高校生(16)だ。中学時代、クラスの女子集団からLINEのグループトークで執拗ないじめを受けた。当時の彼女は硬い髪質に悩んでいたが、「わざと毛の話を振られた」という。

「たといえば「飛沫が怖いからしゃべらない」ということじついで、特定の生徒を無視する。」「3密回避」を攻撃材料にするケースでは、「〇〇と同じ教室にいるとヤバイ」「近くの席の人は除菌しよう」などとSNSに書き込む。

### 「コロナいじめ」

性的な告白をした先の女子高校生は、「裏アカ」に同じ学校の男子名を出していた。おそらくそうした情報から特定されたのだろうが、実は「本アカ」「裏アカ」を問わず、SNS利用にはリスクがますます増える。

「みんなやってるから平気」、そんな意識の低さが顕著に表れるのがSNSはじめだ。SNSはじめでは、不特定多数による誹謗中傷や、事実無根の情報に基づく一方的な攻撃が起きやすい。5月にはテレビの恋愛リアリティ番組に出演していたプロレスラーの女性が自殺に追いやられ、大きな問題になった。

「加害者は被害者の子の悩みやコンプレックスをネタに、エグイ言葉でいじめてくるんです」

「痛い」や「避けよう」は遠回しな中傷だが、個人名は挙げられていない。あくまでも匂わせているだけという表現で、実は巧妙なSNSいじめの典型例だ。

公立中学で生徒指導を担当する教師(41)は、コロナ禍でのSNSいじめの増加を懸念している。「学校再開後、生徒や保護者からの相談が増えたんです。コロナ絡みでいじめのような陰湿なケースもあり、対応に苦慮していま

「今日は15歳の誕生日」と投稿すれば、年齢と投稿日から生年月日がわかる。「家族と焼肉を食べました」と

「加害者は被害者の子の悩みやコンプレックスをネタに、エグイ言葉でいじめてくるんです」

「学校再開後、生徒や保護者からの相談が増えたんです。コロナ絡みでいじめのような陰湿なケースもあり、対応に苦慮していま

「学校再開後、生徒や保護者からの相談が増えたんです。コロナ絡みでいじめのような陰湿なケースもあり、対応に苦慮していま

「学校再開後、生徒や保護者からの相談が増えたんです。コロナ絡みでいじめのような陰湿なケースもあり、対応に苦慮していま